移りゆく臨床の場で…〈PartⅡ〉

社医・社福 副理事長
和漢診療科
高尾（たかお） 公子（きみこ） 先生

インターフェロン

昭和50年代初め、寛解中の白血病6歳男児が腰痛で夜間帯に救急入院した。様子には重病感があった。2日程して水痘様発疹が少数出現し、その後急速に全身を埋め尽くした。乳児期に初めてかかった病気が白血病であった彼に水痘の既往はない。帯状疱疹の神経根痛を伴う重症水痘であった。白血病と水痘ウイルスは特に折り合いが悪く、重篤化・致命的であることが知られていた。抗ウイルス剤はまだ無い頃のこと。当時研究段階のインターフェロンを阪大微研から提供を受け、夜間お母さんが中国自動車道を運転し貰いに走った。同時に最近水痘又は帯状疱疹に罹患した人にTVで呼びかけ献血を募った。幸いにインターフェロンと高抗体価輸血の両方を施行でき一命をとりとめた。その後のインターフェロンは岡山の民間企業 林原研究所が量産化し、今やC型肝炎には欠かせない治療武器となっている。

画像診断機器(CT、MRI)

エピソード1。昭和45年、私が医学部5年生の時、高校の友達の脳血管造影に立ち会うことになった。撮影台に仰臥し、頚に、内頚動脈に注射針をブスッ…。20歳代前半の彼女は全身痙攣をおこし、私はそっと退室した。初めて経験した大人の痙攣で、私もショックを受けた。後日の再検査で脳腫瘍は否定された。

エピソード2。小児科当直をしている時、私は何故か当たり屋で、被虐待児などの大物によく出会った。その日、始まりは(患児は意識がなく)一見静かだった。骨折・脱水もタバコ跡も無く可愛い洋服を着ているが何か変。脳神経小児科の当直医と脳血管撮影をした。そして現れた広範な「無血管野！」数日後患児は死亡し司法解剖を見学した。

エピソード3。昭和50年頃、小脳腫瘍の男子中学生の主治医になった。彼は脳腫瘍を脳血管造影で初めて診断され、脳外科で手術を受けた。腫瘍全部は取り切れないまま、術後小児科に移ったのである。脳圧コントロールの為、頭頂部にリザーバーを植え、脳外科で時々髄液を排出し、小児科医としては全身管理と精神的フォローであった。お父さんと私の2人、廊下のソファーに座って雑談をしていた時、“先生、外国では横になっているだけで頭の中の様子が分かる機械が出来たそうですな～”と話された。私は、“あら、そうなんですか～？”と答えながら、内心では、“そんなモノがある訳ないのに…”と思っていた。何年かしてCTなる検査機を知った時、自分の無知を恥じ、親の子を思う深さを知った一件であった。

昭和63年、病院創設から半年してMRIが入ることになり、東芝の勉強会でMRIの高い能力を知り、溜息が出た。横断面に縦断面の画像、造影剤がなくても脳動脈が撮る。今やMRI、CTともに3D立体画像を見る事が出来る。最近流行の3Dプリンターが医療分野に応用され、CTのデータから腫瘍・血管等をリアルに作り出し、術前のイメージに術者が手にしているのをTVで放映していた。患児の父の熱心さに心打たれた日から40年。驚くべき進歩である。

余談になるが、被虐待児等の司法解剖に何度か立ち会った。同室に警察官が何人かいて、フラッシュとパシャパシャというシャッター音が響く中で行われる。

平成元年の秋、小・中学生だった子ども達へ“科学的根拠も無いのに人を疑うもんじゃない！”との父親の意見で、生後半年の可愛い盛りで死んだ我家の仔猫2匹が病理解剖された。血液・尿の検査依頼に奔走し、最終的に警察が検査してくれるという。解剖には私の他にナント警察官3人が立ち会ってくれた。解剖翌日の朝刊に、数日前某病院のヤカンに農薬が混入されていたという事件が報じられていて、事態が納得できたが、解剖時点では知る由もない。フラッシュとシャッター音が続く光景に“人間と同じにして貰って…”と私は感動した。仔猫たちの死因は流行性疾患であった。

血液製剤

平成21年、私は重症筋無力症の全身型再発の為、岡大神経内科で血液浄化療法を受けた。血漿交換をするICUまで車イスに乗り、看護師さんに押して貰って往復するのだが、その往きには、いつも自分の膝の上にカルテと交換用の2ℓ血漿袋を置いていた。枕くらいの大きさで、1回2ℓ。1日おきに4回施行された。私にはその効果は劇的で、自分の首が支えられない状況で1回目は背長の車イスだったのが、2回目からは普通の車イスで往復できるまでに改善した。昭和50年前後、血液製剤アルブミンが不足し、年末年始休み期間中、小児科には50mℓアルブミン注何本ですと、少ない本数の割当の時があった。ネフローゼ症候群で低蛋白血症・高度浮腫の児に薬が効くまではアルブミン注しかないのに…であった。私の場合2ℓを4回。今はまだ人血から生成している血液製剤なのに…と、心から感謝し、膝の上の2ℓの重みをかみしめたものである。

変らぬもの

それは、人と人とのコミュニケーションの大切さである。医療が人を対象としている以上、コミュニケーションはいつも存在する。患者さんとのそれ、医療チーム内のそれ。インフォームドコンセントやEBMや承諾書類等加わったものもあるが、コミュニケーションの基本は変わらない。コミュニケーションスキルの、まだまだ感はいつもあり、道半ば…である。

EBM:Evidence Based Medicine
（根拠に基づいた医療）

Doctor´s Eyes